

ヒューム哲学における共感の意味

荻 間 寅 男

要旨

ヒューム哲学において、共感の取り扱いとは特異な意味をもつ。青年期の著作『人性論』における情念の解明において、共感は社会を構成する原理として、重要な意味を与えられる。しかし、円熟期におけるその哲学体系の書き換えのとき、情念の解明は削除されるにもかかわらず、共感とは道徳原理の解明に鍵となるものとして、道徳論の場に場を移され残される。

ヒューム哲学は難解曖昧と批評されるが、その全体像の理解に共感の取り扱いの示す意味の解明は不可欠である。

問題の所在

ヒューム哲学には、常に相反する視点が両立する特色がある。青年期の『人性論』においては、第一・二編と第三編では、全く異なる「論調ないし気分」が支配した。また、円熟期に『人性論』を書き換えた哲学著作である『人間知性研究』および『道徳原理研究』の二著（後に一冊に合本され刊行されたので、以下合本された二著を指すとき『両研究』と記す）においては青年期と全く異なる「論調ないし気分」が支配する。ヒュームの真意はいかなるものであったかを解明するとき、注意すべきは最初三編構成であった『人性論』がその後の書き換えにおいて、いわば二巻構成に改められたことである。また、そのなかで前作において第二編のなかで重要とされた「共感」の原理が、後の作品では前作の第三編に相当する道徳についての考察において、肝要な機能を果たしていることである。

共感の原理は、知覚の生起する過程を解明する『人性論』第一編の方法を承けた第二編における情念の生起する過程を解明する取り扱いにおいて、その働きを示された。しかし、「人性のきわめて強力な原理」として、第三編においても、道徳にかんしてその働きは注目される。他方、情念の生起の過程の解明を含まない後年の作である『道徳原理研究』においても、肝要な機能を果たすとされる。

したがって、両著作における共感の原理の理解は、ヒューム哲学の全体像を明らかにする

ことに資すると思われるが、本稿は研究の前半として、まず問題の沿革を整理し、さらに『人性論』第二編におけるヒュームの示す共感の原理を解明することとする。次稿においては『人性論』第三編および『道徳原理研究』における道徳にかんしての共感の働きを解明し、ヒューム哲学の全体像を考察することにする。

(一)

ヒュームの哲学著作には常に難解曖昧という批評がなされてきた。事実、ヒューム自身が「晦渋な哲学」(1:456)であると認め、また多くの研究者が指摘するように、ヒュームの用語法、表現法には曖昧さがみられる。殊に青年の客気をはらむ『人性論』第一編「知性について」はその真に意図するところは捉らえ難いという点で一致が見られる⁽¹⁾。さらに、ヒューム自身が最晩年に読者に対して、『両研究』が自己の哲学思想を十全に表明するものであり、青年期の著作において自己の哲学を表現するものではないと述べたことによって、かえって読者は青年期の難解晦渋な議論と成熟期の流暢簡明な議論との大いなる相違に直面し当惑することになった。一層ヒュームの真意がいつれにあるか判然としなくなっている。したがって、没後二百年をはるかに過ぎた現在においても、研究者のあいだにヒュームの哲学著述に関し、共通の理解は少なく、また著作そのものに決定版が存在しないという事実が存在する。

ヒュームの用語法・表現法には曖昧さがみられることは、『両研究』に添えられたヒューム自身の最晩年の読者あての『緒言』においてもまた同じである⁽²⁾。

「本巻に含まれる諸原理・諸推理の大半は『人性論』と称する三巻の著作において公表された。その著作は筆者が学窓を離れる以前に企画し、そしてその後ほどなく執筆し、公表した。しかし、その不首尾を見、筆者はあまりにも早急に出版した誤りに気づき、全体を以下の作品に書き更めた。かつてのいくつかの推理の遺漏、また多数の表現のそれが匡されたことを筆者は望むところである。しかしながら、筆者の哲学に応答する榮譽を賜われた数々の作家諸氏は、筆者が認めない若年の作品に砲列を向けるという煩を取られ、それに対して得たと彼らの想像するなにかの勝利に勝ち誇る気取りでいられる。これはあらゆる公平・公正の決まりにもとる所業であり、かつかれらの論争好きの策略の実例に外ならず、頑迷なる熱狂家のみがなしうることと考えるものである。今後、筆者は以下の作品のみが、筆者の哲学的な心情ならびに原理を含むものとみなされることを願うものである。」(2:2)

まさに、文言だけを見るならば、ヒュームの用語法・表現法の曖昧さが露呈する文章であり、

その真意を攫みがたいものである。これは読者を誤解させる不親切な言葉であり、『緒言』すなわち広告という趣旨であっても、あえて云えば、誠実さを欠く文章と言っても過言でない。なぜなら、三巻であった『人性論』が、『人間知性研究』と『道德原理研究』という『両研究』二巻に書き換えられたことは、内容に大幅な異動を予想させるが、ヒュームは「あまりにも早急な出版」と「多数の表現の遺漏」という形式的な変化のみに読者の注意を向けようとする。『人性論』の「大半」は「書き更め」られて、『両研究』に収められたと称するが、実は「大半」は割愛削除された。したがって、『人性論』「全体」の表現を容易に「書き更めた」ことを期待して『両研究』を手にする者は、著しく異なる内容の著述を読むことになる。もちろん、自伝において「印刷機から死産」(4:xxxii)したと云われ、英国内にほとんど反響のなかった『人性論』の内容を理解した当代の読者はまれであり、読まれることなくただ悪評だけが流布したという消息がある。よって、ヒューム自身が「晦渋」と認める内容を再説した上で、変更点を指摘することも、煩雑である。また、云わば寝た子を起こすことであることは確かである。とはいえ、そもそもいったい青年期の著述の表現上のどの箇所に遺漏を見だし、書き換えの意思をもったのかについては全く説明が与えられない。まして、『人性論』を筆者が認めない「若年の作品」と称するのであれば、そのいずれの箇所を正確に否定するかを明示しなくとも、内容の変更にかんしてせめて数段の簡明な説明があつてしかるべきである。

あと一つ読者を誤解させるのは、書き換えを構想したのはあたかも『人性論』を上梓したかなり後の時期のことであるかの印象を与えることである。ヒュームの生前に『人性論』が自身により再版されることがなかったため、ヒュームが著作のどこに加筆改訂を企てたか推測する手掛かりは乏しい。しかし、近年発見された自筆加筆本には、第三編「道德について」の部分に多数多量の書き込みが見られ、道德について、出版直後において検討を重ね、書き換えの意図はともかく、自説の訂正を図っていたことを推察させる⁽³⁾。また、ヒュームが道德・政治上の主題について、思索を巡らせていたことは、そもそも『人性論』冒頭の人間学の構想において明白である。また第三編出版の約一年後に『道德政治論集』、さらにその半年後に、その第二巻、また半年後に第一巻の改訂第二版と矢継ぎ早に出版したことにもうかがわれる。少なくとも、視角は異なるとしても、道德また政治についての考察を重ねていたことは否定出来ない。そうであれば、円熟期の『両研究』において、ほぼ全部削除された情念の取り扱いにおいて、核心的な意味をもった共感の概念が、『道德原理研究』に移動され道德の取り扱いに関連して、検討されることになることが、『人性論』第三編出版の時期に着想されたと推測するのは決して不合理ではないといえよう。

(二)

他方ヒュームの思想のおかれた時代を考慮し、また『人性論』全体を内在的に考察するならば、「緒言」は自己の心情を正直によく表現していると言えよう。最晩年のヒュームの文言は、円熟期の「田舎紳士の規範」にこだわる一方で、青年期の「晦渋」で「抽象的」な過激な言動がもちだされることに辟易している心情を表す⁽⁴⁾。円熟期をいつの時期から指すかは確定しがたいが、哲学著作の最初の書き換えである『人間知性研究』（初め『人間知性についての哲学的試論』と題す）の出版の1748年に始まるという、間違いはなからう。その年は知己の誘いで外交使節団の一員として、ほぼ丸一年ウィーンまで旅行、その間に他に二点を上梓するという多忙多産な年になり、文名を揚げ、以後著作は著者名を示すことになる。各界の人士と交際を深める一方で、以後再々教会のある勢力から排斥運動的となり、実際いくつもの論稿は教会勢力の迫害を恐れ公表を留保した経緯がある。教会勢力の攻撃をおそれつつ、留保したものの筆を加えつつ公表の機会をうかがうヒュームにとって、いわば修復しがたい傷物の『人性論』を「認めない若年の作品」として、葬りたく思うことも理解しうるものである。出版が困難という判断は、遺稿の『自然宗教にかんする対話』を親友アダム・スミス、旧知の出版者ウィリアム・ストラハン、甥デヴィッド・ヒュームの三者に託し、結局甥ヒュームが没後数年をへたときに出版したという経緯にもうかがうことができる。

『人性論』の「論調ないし気質」は前と後ろでは著しく異なる。客気に満ちた『人性論』第一・二編の気分は、「人生の日常事に携わる」第三編の気質にあいなじむものではない。ケンプ・スミスは『人性論』第一・二編と第三編の「論調ないし気質」の差異について指摘する⁽⁵⁾。事実、『人性論』第一・二編は、なによりも「実験的方法」すなわちニュートン的方法を「精神上の主題に導入する企て」であり、

「あくまで実験を行い、すべての結果をきわめて単純かつきわめて少数の原因から解明し、よってもって全原理を可能な限り普遍的ならしめるよう努めなければならない……」(1:xxi)

「もともと自然の経過においては……結果は多数でも、結果の起こる所以の原理は普通にはきわめて少数かつ単純である。」(1:282)

したがって、上述の原理をさらに少数の原理に還元できる途を研究する」(1:282) ことを課題にするという、少数の原理によって万象を説明する立場に立つ。たとえ、「少数の原理にま

で、行き着かなくとも、ヒュームは『人性論』末尾において、

「解剖学者が表す事物の絵図には多少不気味なものがある。……とはいえ、解剖学者は画家に助言するに至極適している。いな、前者の扶助なしに後者の芸術で卓越することは實際上不可能でさえある。……これと同じく、人性にかんする最も抽象的な思弁も、たとえいかに冷ややかで興のないものであっても、実践的道義の支援となる。」(1:621)

といい、自己の冷徹な学的探究の立場を確認する⁽⁶⁾。

これに対し、『人性論』第三編は明らかに異なる気質が支配的である。ケンプ・スミスはハッチソンの方法が支配的であると指摘した⁽⁶⁾。ハッチソンの方法が意味するものがなにかという議論はともかく、第一・二編においては知覚・情念の生起する過程の解明に注力され、少数の原理によって万象を説明する努力がなされたことは、もはや第三編においては思い出されない。かわりに以前は取り上げなかった、心情の分類またその特性の記述に注意が向けられる。第三編冒頭の『緒言』においても、ヒュームは、

「本書は『人性論』の第三卷であるが、ある程度は他の二卷と独立していて、読者が他の二卷に含まれた抽象的論究のすべてに立ち入ることは要求されていない。」(1:454-455)

第三編において抽象的論究は重視されない。

「長い連鎖の論究では、最初の命題の確証性を最後まで保存しなければならないが、しかもそのような論究では、哲学の根本原則にせよ、日常生活のそれにせよ、最も広く受け容れられた根本原則まですべてしばしば見失われるものなのである。(1:455)

「人生の日常事に携わる」道徳にかんする問題では、「長い連鎖の論究」によって「根本原則」にまでたどり着くことは至難であるという。しかしながら、

「[道徳の] 問題は人間の了解範囲内にある」(1:456)

「道徳は行動や情念に影響を及ぼす。して見れば、道徳は理知からくることは出来ない……道義のいろいろな規則は理知の結論ではない。」(1:457)

なぜならば、「道徳性は理知の対象ではない」(1:468) のであって、「徳悪徳は理知によって存在を推論できる事実ではない」(1:468)。かわりに、「徳悪徳は、感じの対象であって、理

知の対象ではない」(1:471) のであり、「徳悪徳は、我我自身が抱く快不快の心持ち」(1:471) と見る。

問題は、常にヒュームの言説にみられる用語の曖昧さ、多義性にある。近年では、ノートンが整理するように、理知という語に七つの意味をもたせ、うちすくなくとも四つの意味がここに示される⁽⁷⁾。知性、真偽の発見、抽象的推理ないし観念の比較、そして蓋然的推理である。全体としては初めの知性の意味が多いが、その他の特殊な意味をもたせるときもある。錯綜した議論であるので、いまは立ち入らない。要するに、道德にかんする原理は狭く長い連鎖の論究による確立されるものではなく、日常の経験のなかにおいて、考察されるときに成立する原理であり、ヒュームによれば幾多の事象のなかにも観察される経験的事実ではない。

したがって、第三編において共感が「人性のきわめて強力な原理」(1:577) であるとされるとき、そこでいう原理は、「道德性は学の対象である関係にすこしも存しない」(1:458)、「そればかりか、道德性は知性の発見できるいかなる事実に存しない」(1:468) とされるときに見いだされるものであり、第一・二編において捉えられた少数の哲学の根本原則、言い換えれば、抽象的な論究にあつて成立するものではない。

問題は、共感はそれでも「人性のきわめて強力な原理」といい、「原理」と称されていることにある。第三編においては、「根本原則はしばしば失われ」、「了解範囲内」の事柄があるのみである。「道德性は学の対象である関係にすこしも存しない」のであり、「快不快の心持ち」であるならば、そこに「原理」である共感が存しうるのか大いに疑問である。ここに、正義また所有という人為的徳の考察が導入される理由があるが、いまは触れない。

(三)

そもそもヒュームが共感をいかなるものと捉えていたのか確認しなければならない。

ヒュームが共感を重要な人性の原理と捉えるのは、『人性論』第二編の「情念について」においてである。第二編は基本的に情念の生起の過程を明らかにするものである。

要するに、ヒュームの説くところでは、情念は身体的快苦および感覚的印象から生じる二次的内省的印象である。その情念は、快不快から直接に生じる直接情念と、自己または他者を情念の対象とすることと、情念自身の組み合わせによって四つの主要な間接情念に区別される。四つの主要な間接情念とは、自負・自卑・愛情・憎悪である。間接情念の生起の過程の解明が第二編の論究の大半を占め、意志と直接情念の解明に残りが当てられる。

共感が情念の生起の過程の解明において、取り上げられる所以は、間接情念の生起の過程において、他者の情念を特異に自己のものとする心の機能として注目されることにある。四つの主要な間接情念は、自負・自卑・愛情・憎悪である。それらは対象として自己または他者をもつ観念の関係と、好悪または快不快の感覚的気持すなわち印象の二重の関係が成立する特異な情念であり、いわば四辺形をなすこれら情念を軸に様々な情念を把握することが出来る。そのような間接情念の二次的原因が共感である。

「他人の心的傾性や心持がわれわれ自身のそれといかほど異なっても、……それら他人の心的傾性や心持を交感伝達によって受け取る向癖に勝るものはない。」(1:316)

われわれは「類似によって、他者の情感をうる」(1:317) のであり、「共感にて、自我の観念から他者の目的に移る」(1:318)。情念が共感によって心に注入されるとき、結果によって知られるだけだが、この外的標識が情念の観念を心に伝え、この観念は印象に転換する。すなわち、強い勢と活気をもつ情念そのものとなり、他人のうちにある原型の情念と等しい情感を産むというのが、ヒュームの整理である。われわれに関係あるものはすべて、等しい活気をもって想われる。その関係が因果の関係でなくとも、われわれがそれに類似または接近の関係を見いだす。

「他のあらゆる事物の知覚から独立なわれわれ自身というものは真実には無である。……そのゆえわれわれは視線を外的事物に向けざるをえないのであり、したがってわれわれに接するもの、あるいは類似するものに最大の注意をもって、考えることはわれわれにとって自然である。」(1:340-41)

要するに、共感はなにかの関係をわれわれが見いだすものに、われわれが自身のこととして心を動かす心的機能である。

しかし、われわれがなにかの関係を見いだし、共感をもつとはいえ、その関係は接近および類似というきわめて希薄な関係である。いったい、どのような範囲まで、共感は拡大するのか。もともと「あらゆる種類の推理は比較にすぎず」(1:73)、「原因結果の関係のみが感官を越えることができる唯一の関係である」(1:74) というのがヒュームの見解であった。「感官を越える」ことが、共感においていかにして可能になるかは、うえに見た「われわれはに接するもの、あるいは類似するもの」という資格のみである。これについて、ヒュームは云う。

「共感の拡大は、対象の人物の現在の状態にかんするわれわれの感官知覚に著しく依存する。もともと、他人の現在の心持ちについてさえ、その心持ちそのものを感じるほど生氣に富む観念を造ることは、想像の大きな努力である。」(1:385)

共感はいくまで、われわれの知己であり、しかもその心情をよく推し量ることができる人物に対して、はたらく心情であるというのが、ヒュームの『人性論』第二編における認識である。

このような共感を、まったく「われわれの感官知覚」に捉えられない人々にまでいかにして拡大することが出来るのか。ヒュームは道德の考察において、共感を「人性のきわめて強力な原理」と説いたとき、自身の今まで言説と著しく異なる立場に立ったのか、次の機会に検討したい。

註

- (1) ヒューム哲学、殊に『人性論』第一編の受け止め方は、ジョンストン (10:8-10)。
- (2) 『両研究』「緒言」拙訳。執筆は、一七七五年十月ごろで、ヒュームは出版者のストラハンに一七七二年版二巻本『著作集』Essays and Treatises upon Several Subjectsの第二巻の残部に添付するよう依頼したが、結局ヒュームの生前最後の校正となった一七七七年版の『著作集』において、日の目を見た。
- (3) コノンの発見した第三編のヒューム自筆加筆本から、いったいヒュームの意図はなにか判断は分かれる(7)。
- (4) フォーブスが指摘するように「十八世紀田舎紳士」の心情がヒュームの強く心を捕らえていたことは、当代の愛すべき郷紳ロジャ・ド・カヴァリを創造したアディソンの名を幾度か挙げることにうかがわれよう。
- (5) ケンプ・スミス (11:73)、なお、ヤルデン・トムソンは、長年看過されてきたヒューム哲学を正当な哲学的関心の対象とした最大の功労者は、ケンプ・スミスであると指摘する (15:1)。
- (6) ヒュームは『人性論』第一・二編と第三編公刊のあいだの時期の一七三九年九月十七日付けのハッチソン宛の書信において、画家よりも解剖学者でありたいと述べる。
- (7) ノートンはヒュームは理知の七つの用法を、情念に関連して示すと指摘する (12:97-8)。

文献：(ヒュームからの引用は初めに以下の文献番号、その後に該当書の頁数を示す。『人性論』の訳は大概訳に準じたが、論者の判断で若干変更した。)

1. Hume, David, A Treatise of Human Nature, 2nd ed., ed. by L.A. Selby-Bigge and P.H. Nidditch (Oxford: Clarendon, 1978)『人性論』大概春彦訳 (岩波文庫, 1948-52)
2. Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals, ed. by L.A. Selby-Bigge and P.H. Nidditch (Oxford, 1975)
3. Philosophical Works of David Hume, Green, T.H. and Grose, T.H. eds. 4 vols. (London, 1874-75)
4. Essay, Moral, Political and Literary. ed. by E.F. Miller rev. ed. (Indianapolis, 1987)
5. The Letters of David Hume, Greig, J.Y.T., ed. 2 vols. (Oxford, 1932)
6. Ardal, P.S., [1966] Passion and Value in Hume's Treatise (Edinburgh)
7. Connon, R.W., [1977] 'The Textual and Philosophical Significance of Hume's MS Alterations to Treatise

- III', in G.P.Morice ed. *David Hume; Bicentenary Papers* (Edinburgh)
8. Forbes, D., [1975] *Hume's Philosophical Politics* (Cambridge)
 9. Jessop, T.E., [1973] 'The Misunderstood Hume', in W.P.Todd ed. *Hume and the Enlightenment; Essays presented to Ernest Campbell Mossner* (Edinburgh and Austin)
 10. Johnson, O.A., [1995] *The Mind of David Hume; A Companion to Book I of A Treatise of Human Nature* (Urbana, Ill.)
 11. Kemp Smith, N., [1941] *The Philosophy of David Hume* (London)
 12. Norton, D.F., [1982] *David Hume; Common-Sense Moralism, Sceptical Metaphysician* (Princeton)
 13. Noxon, J., [1973] *Hume's Philosophical Development* (Oxford)
 14. Penelhum, T., [1975] *David Hume* (London)
 15. Yalden-Thomson, D.C., [1983] 'Recent Work on Hume: A Survey of Hume Literature 1969-1979', *American Philosophical Quarterly*, 20(1), 1-22.